

日本産業衛生学会東海地方会

# 地方会ニュース

発行所 地方会ニュース編集事務局  
 〒 470-1192  
 愛知県豊明市杣掛町田楽ヶ窪 1-98  
 藤田保健衛生大学医学部公衆衛生  
 電話 (0562) 93-2453  
 FAX (0562) 93-3079  
 発行責任者 井谷 徹

(題字 皿井 進筆)

## 故 島 正吾 先生 特別追悼号



### 島 正吾 先生ご略歴

昭和4年8月8日生

昭和29年3月	名古屋大学医学部卒業	平成3年7月	文部省 学位授与機構審査会専門委員
昭和34年3月	名古屋大学大学院医学研究科修了	12月	愛知地方労働基準審議会委員
昭和36年8月	名古屋市立大学医学部助教授 (公衆衛生学)	平成4年4月	労働大臣功労賞
昭和47年4月	名古屋保健衛生大学医学部教授 (公衆衛生学)	7月	労働省 中央じん肺診査医
4月	日本胸部疾患学会理事	平成5年4月	日本産業衛生学会理事長
昭和53年4月	日本産業衛生学会理事	平成6年4月	日本職業アレルギー学会理事
昭和55年4月	日本衛生学会幹事	8月	愛知県環境審議会委員
昭和57年4月	労働大臣功績賞	12月	厚生省 公衆衛生審議会委員
4月	愛知県公害審査会委員	平成8年4月	日本ストレス学会理事
昭和58年3月	愛知県労働基準局地方じん肺診査医	5月	学校法人藤田学園理事
昭和59年4月	日本産業衛生学会東海地方会長	平成9年4月	藤田保健衛生大学副学長
昭和62年4月	日本産業衛生学会副理事長	4月	藤田保健衛生大学学長
平成元年8月	大学設置・学校法人審議会専門委員	平成11年4月	環境庁長官賞
10月	藤田学園保健衛生大学医学部長	4月	藤田保健衛生大学名誉教授
平成2年5月	愛知県医師会産業医部会顧問	4月	労働福祉事業団 愛知産業保健推進センター所長
			日本産業衛生学会東海地方会名誉会長

## 惜別の辞

藤田保健衛生大学医学部長 中野 浩

ここに島正吾先生のご葬儀にあたり、先生のご前において一言ご挨拶させていただきますことをお許し下さい。

先生は昭和29年名古屋大学医学部をご卒業後、第一内科にご入局になりました。日本産業衛生学会評議員になられ昭和36年8月には名古屋市立大学公衆衛生学講座の助教授に就任されました。先生は結核、じん肺などのご研究を通じ日本産業衛生学会、日本胸部疾患学会、日本結核病学会の評議員・理事をおつとめになり、平成5年より日本産業衛生学会の理事長になられています。また労働災害防止・公害対策の社会問題にも取り組まれ中央じん肺診査医や公衆衛生審議会委員もおつとめになりました。このように先生は今日のわが国の社会医学を導き築き上げられた先生でございます。

藤田学園には創設時の昭和47年4月医学部公衆衛生学教授としてご着任され、今は亡き藤田啓介総長のもと、学園の発展にご尽力されました。平成元年よりは医学部長、平成8年よりは理事・副学長、平成9年4月から2年間藤田保健衛生大学学長をおつとめになりました。

この間ご専門の公衆衛生学の名講義はもとより、卒前卒後時の学生に対する師となり親となりの全人教育はすばらしく、先生に後押しされて国家試験を突破した卒業生は数知れずでございます。先生ごらん下さい。先生の教え子は若き医療人として地域に日本に世界にはばたいています。

思いがけないご入院のあとも先生のふくよかな赤いほほと、するどい眼光は変わらず、小さな手帳にぎっしりつまったスケジュールを見せながら、先生は医学について学会について藤田学園について熱く語られました。

先生の安らかなご逝去、先生のいつに変わぬお写真の前では、先生に"やあ"と声をかけられそうな気がいたします。

しかし、お別れは人の世の常でございます。先生の遺された医の心、教育の心を胸にひめ、精進いたしたいと思っております。

先生どうか安らかにやすみ下さい。

## 弔 辞

名古屋大学名誉教授、愛知県がんセンター名誉総長 青木 國雄

謹んで藤田保健衛生大学元学長、同大名誉教授 故島 正吾先生のご霊前に追悼の言葉を捧げます。

島 正吾君、君と呼ばせて戴きます。私がこうした場で君の弔辞を読むことになろうとは思ひもかけぬことで、驚きと痛恨で胸一杯であります。年長で病弱だった私こそ、君から弔花をうける予定をしておりました。残念であり、悲しい極みです。

初めて君とお会いしたのは、昭和30年(1955)夏、名古屋大学医学部第一内科医局長室でありました。同級の鈴木明君と君がつつましく、また極めて前向きの姿勢で待っておられました。私は前年、第一内科の命で東京清瀬にある結核予防会結核研究所で新しい肺結核の臨床技術や考え方を学ぶよう内地留学をしておりました。第一内科が新しい事業を始められ、その診療要員として帰る様にとのことで、六ヶ月で打ち切り帰局していました。その時、私は戦争ですべてが消失した名古屋大学と、施設、研究資材が残り、多くのスタッフと研究費を持つ結核研究所としては、基礎研究のレベルに著しい差がある。したがって、私の後に新進気鋭を二年位派遣することが必要との答申をいたしました。その結果が両君の東京派遣ということになり、私が案内役を仰せつかったわけであります。

名古屋・東京間5時間の汽車の中、研究所についていろいろ説明をいたし、結核研究所ではご指導戴く岩崎龍郎先生に、共にご挨拶を申し上げ、ついで研究所内をまわり、知己、友人になにかとご両人のご指導をお願いしたのを思い出します。

期待に違わずお二人は大変努力され、また共に立派な研究成果を挙げられました。島君は解剖学、病理学的知見に基礎を置いた肺、とくに肺尖部X線写真読影の基盤をつくれ、評価の厳しい結核研究所の北鎌平先生から名古屋大学はすばらしい人を送りこんでくれたと賞賛をうけました。この論文は後に単行書になったと記憶しております。

帰名後、君は日比野進教授のご指導の下、当時わが国で発見されたヒストプラズモシス症の研究に取り組まれました。そしてこの病は外国から輸入された陶土の中に病原体があり、それを吸入して発病するという機序を見事な手法で証明されました。いい仕事をしたと

日比野先生が大変喜んでおられたのを思い出します。このすばらしい新人を産業企業体の医学研究者はほつてはおかず、次々と職業病の仕事を持ち込んだと聞いております。

当時私は第一内科の要請で、臨床医をやめ、予防医学講座で疫学の勉強をしておりました。ある日島君が突然研究室へ来られ、今名古屋市立大学の公衆衛生学講座から教官の誘いを受けている。先輩として意見をうけたまわりたいとのことでした。いろいろ申し上げたかと思いますが、強調いたしましたことは、1.公衆衛生学へゆくことは臨床医をやめることである。2.大学では個人の研究成果が評価されるので、適当な役職でなければ自分が思う研究はできない、の2点でありました。やがて助教授で赴任されることをお聞きして安心いたしました。当時としては破格の待遇であり、改めて実力を再認すると共に、任命された奥谷博俊教授の卓見に敬意を表しました。

期待に応じて君は珪肺、珪肺結核の研究や対策に、きれのよい仕事を次々と発表され、まもなく日本の指導的地位を確保されました。その他職業性じん肺についていろいろ新しい知見を発表され、時代の脚光を浴びておられました。私が外国留学から帰りますと、産業衛生学会会長でもあり、後に理事長となられた大同病院長皿井進先生から島君はすばらしいと度々お話を承り、又産業医の先生方が大変頼りにされておられることから、君の転進は大成功だったと嬉しく思いました。

昭和42年(1967)、私が東海地方の結核・胸部疾患合同学会を開催した時は、島君に職業性呼吸器疾患の特別講演をお願いしました。新しい知見にみちた誠にするばらしい講演で、しかも研究成果の展示を同時にして下さり、会員一同に深い感銘を与えました。噂どおりの成長ぶりでした。

1970年代、日比野進先生が厚生省難病研究のうち、血液難病研究班の班長となられた時、君は産業企業体における血液難病調査を担当され、短期間に全国的な研究ネットをつくられ、毎年実態調査を繰り返され、わが国の産業医の管理下にある集団での疾病特性と原因について見事な成果を示され、血液学者から高い評価を受けられました。何でもこなせる実力を示されました。

ご略歴から拝見するように数々の要職に、常に就いておられましたのも当然のことと存じます。また1995年の日本医学会総会では日本衛生学会長と産業衛生学会理事長の二つを兼ねられたのもその評価のあらわれであります。

君の講演や講義はいつも人を魅了しました。それは基礎的研究と人間集団での調査成績を緻密にくみ上げられ、論旨を、順を追って系統的に話されるのでわかりやすく、声も大きく迫力がありました。

討論でも同様で理をつめ、鋭い舌筆で迫られるので味方にとっては頼もしく、敵なしの感を与えることもしばしばありました。講義もいろいろ工夫をこらし、分厚い資料を配布されるので、忙しいのにと感服することしばしばでした。

この様にどんな方面でも一流の仕事をする多才、多能の人物であり、戦後わが国に輩出した卓越した医学者の一人と私は考えております。君は次から次へと難問解決を要請され、全力をつくされました。すでに高い評価を受けておられますが、今後さらなる高い評価が期待できると私は信じております。

君はよき伴侶にめぐまれ、すぐれたお子様を育て上げられ、よき家庭を築かれました。これも立派な業績であります。同時にこの多才、多能、超多忙の君を支えた奥様の内助の功も偉大であり、敬意を表するものであります。

思い出はつきませんが、最後に、島君「君は本当に大きな仕事を成し遂げられた」と声高に叫びまして終わりとさせて戴きます。

島君ごゆっくり平和にお休み下さい。そして高い所からご家族や私共をご加護くださいます様。

## お別れのことば

日本産業衛生学会東海地方会長 井谷 徹

島先生の突然の訃報に接し、驚くとともに、大きな支えが突然なくなったという感覚を覚えました。先生に最後にお目にかかったのは、昨年暮れ、お見舞いに伺ったときのことです。その日は、ご体調が比較的よいとのこと、1時間弱に渡って、お元気にお話をしてくださいました。「これからは、君たちの時代だから、産業衛生の発展のためにがんばりなさい。そのために必要ななら、私も利用してくれればいいから。」といった趣旨のことをいつもの笑顔で語ってくださいました。ご支援・ご指導して頂こうと改めて思っていた矢先の訃報で残念でなりません。先生は、日本産業衛生学会の理事長、理事を長く務められ、我が国の産業衛生の発展にご貢献されました。それと同時に、卓越したアイデアと行動力で、産業衛生学会東海地方会を長年に渡りリードしてくださいました。先生が、全国に先駆けて創刊されました地方会ニュースは、今日なお地方会員のコミュニケーション手段、地方会からの情報発信の手段として生き続けています。また、地方会主催の研修会や研究会活動を通じ、当地域の産業衛生レベルの向上に果たされたご功績は甚大であります。先生に直接指導して頂けなくなりましたことは残念ですが、先生がお示しになった産業衛生学の研究、実践、学会活動などのご業績を通じて先生のお考えを学び、産業衛生学発展に微力を注ぎたいと思っております。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 島先生を送ることば

### 島 正吾先生を偲ぶ

日本産業衛生学会 理事長 藤木 幸雄



日本の産業保健—あゆみと—展望—日本産業衛生学会70年史編集委員会編(法研 平成12年)はある意味での島先生の集大成であると思います。先生の思いが編集委員会に強く託されています。担当理事の青山英康、編集委員長野村茂両先生が島先生の思いを繰り広げられています。

この思いは70周年史の巻頭言に集約されています。機会があれば再読していただければと思います。あかあかと一本の道とほりたりたまきはる(魂きわる)我が命なりけり 茂吉 と結んでおられます。

先生のご病気のことは触れませんが、本年1月3日午後5時半過ぎに逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。70周年誌が刊行される前に「死」を意識されていたのか、余命の長きなきことを予測されていたのかも知れませんが、本追悼文の作成に当たって、「たまきはる我が命なりけり」の言の葉が私の胸にささっています。さらに、芭蕉の光陰は百代の過客にして...も引用され、重き時代、光の影にも触れておられます。

先生のお人柄は snappy highbrow というべきでしょうね。芭蕉の弟子 二本目は 与一も困る 扇かな を借用して、先生のご経歴、追悼文は、一本目の扇、学会誌を読んでください。 擲筆。

合掌

追伸：東海地方会のご発展を心からお祈りいたします。

### 島 正吾先生の思い出

名古屋大学名誉教授 竹内 康浩



私はインターンするとき、当時、名市大公衆衛生学教室で助教授をしておられた島先生のところに、同級生の若林君と通い、じん肺を教えていただいた。肺の模型を使った立体構造から始まり、写真のスケッチまで、肺のレントゲン写真の読み方の基礎を教えていただいた。これがその後の長い労働衛生における島先生とのおつきあいはじめであった。

私がじん肺に興味を持ったのは、学生時代に名古屋大学医学部衛生学教室の山田信也先生、松下敏夫先生らが指導しておられた産業医学研究会に入り、市民公開の医学祭の展示で「じん肺」を取り上げ、佐渡金山の鉱夫の「よろけ」の悲惨さを知り、さらに、野村茂先生、山田信也先生のご紹介で北九州の小さな炭坑の狭い切羽まで入れていただき、坑内労働ではじん肺、脊椎損傷などの難治の健康障害が多発していることを体験したからです。

インターン後は名古屋大学医学部大学院に入り、教室の主な研究テーマである有機溶剤中毒の研究に取り組むようになったために、研究面では島先生からは直接ご指導を受ける機会は少なくなりました。当時は名市大ではじん肺、三重大学では騒音、岐阜大学では金属、名大では有機溶剤を中心に研究が行われていたが、労働衛生の実践ということでは、労働現場ではあらゆる課題があり、広く専門知識を身につける必要があった。そのために、4大学の交流は盛んで、それぞれの研究会や研究室訪問で、教えていただく機会が多かった。じん肺についてはその後も島正吾先生から沢山のことを教わった。

島先生は皿井先生の後を継いで、日本産業衛生学会東海地方会長になられたが、平成5年4月からは日本産業衛生学会の理事長に就任されたために、私が地方会長を引き継ぐことになった。平成7年には名古屋で開催された日本産業衛生学会の学会長を私がつとめることになり、島先生には大変なご支援をいただいた。このように、

労働衛生の学問だけでなく、学会運営においても先生からは多大なご指導やご支援を受けてきた。

ここに、島正吾先生からの生前の格別なご厚情に深く感謝するとともに、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

### 島先生を送ることば

名古屋市立大学名誉教授 奥谷 博俊



昭和35年名市大医学部公衆衛生学教室が新設され初代教授として就任した。その翌年名大医学部第一内科の日比野進教授から連絡があり、同教室の島正吾助手を私の教室の教官に採用方要請があり、助教授として迎えることになりました。同47年先生が藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学初代教授として赴任されるまでの約10年の間、教育・研究・公衆衛生実践活動を私共はともにすることになりました。

教室では産業保健、公害保健を専門分野とし、職業病予防として、珪肺、じん肺、綿肺症、ベリリウム症、TDI症、鉛の予防と硫酸化物、窒素酸化物、鉛の大気汚染物質による生体影響とその防止対策を主題としていました。先生は教室の最有力メンバーとして活躍され、特に瀬戸窯業集団(全中小零細企業を含む)珪肺、じん肺管理では約1万2千名以上の人々を対象とし職業病管理を実施し、現在労災認定者は約1千五百人に及んでいます。

また同44年某工場で発生したニッケルカルボニル中毒の超重大災害では、該物質暴露、発症から入院、退院までの経過とその背景要因を詳細に検討したことは忘れることができません。

保健衛生大学就任以来産業医学を中心に研究され、斯会の権威者として名を高められ、学会では産衛東海地方会長、産衛理事長、学内では医学部長、学長を歴任され、産業医学の分野では勿論、広く医学医療の発展に貢献されたことは極めて大なるものと思います。

先生の数多くの業績に対し、心から敬意を表し謹んでご冥福をお祈り致します。

### 島 正吾君を送ることば

名古屋大学名誉教授 井上 俊



新年早々、島 正吾 君の突然逝去の報らせに驚きました。会えばいつも、若くて元気な君だったから。私より約10年後に名大医学部を卒業され、日比野内科で約7年間臨床医学研鑽、学位を取られてから、名古屋市立大学に移られ、公衆衛生学助教授として社会医学、産業衛生学の調査・研究に取りくまれて約10年、その

後名古屋保健衛生大学(後に藤田保健衛生大学と改名)医学部へ公衆衛生学教授として就任され、社会医学、特に産業衛生学の教育・研究活動に熱心に取り組まれて約25年、そして大学での最後の2年は、学長を努められました。更に大学での生活が軌道にのった任期中の後期から、9年間は日本産業衛生学会東海地方会長を、続く6年間は日本産業衛生学会理事長をつとめられ、退職後、4年間愛知県産業保健推進センターに勤務されて、東海地方の、そして日本の産業保健の向上のために大きな社会的指導力を発揮されました。

こうして改めて君の活躍ぶりを辿り、各時期の多数な記録に目を通して行くと、日本の高度経済成長期、労働者の保健問題が多発し多様化する中で、君のそれに対する的確な対応が、読み取られ、素晴らしいと思いますね。

それにしても、残念だな、73才でおさらばとは・・・。ご冥福をお祈りいたします。

## 島 正吾先生を偲んで

名古屋大学・愛知医科大学名誉教授 祖父江 逸郎



昭和30年10月、私はアメリカ留学を終え、太平洋航路プレジデントウイルソン号で横浜に帰国した。その時、何人かの教室員が出迎えに来ていただいた。その中に島先生の顔があったことを覚えている。それ以後の永いおつき合いの始まりである。

島先生は花の29といわれるクラスの一人で、才覚に満ち際立った存在であった。戦後復興を支える各種産業の担い手としての従業員の健康問題、作業環境などに強い関心を示した。情熱的で、木目細かなストラテジーと、徹底して追究する姿勢には圧倒されるものを感じた。組織を運営する手腕もすぐれており、日本産業衛生学会の理事長としてリーダーシップを発揮、学会を飛躍的に発展させた先生の評価は高い。また、島先生は藤田保健衛生大学の顔であり、看板教授としても有名である。私立医科大学協会の会議では、席が隣り同志で、医学教育のことや医系大学の運営、特色などを語り合う機会があった。学生の医師国家試験対応についての指導にはもっとも力を入れ、いかなる人の追従も許さず、目を見張るものがあった。科学的分析をもとに綿密な推理を働かせた判断と実行力は見事なものであった。

少子高齢社会を迎え医学、医療のあり方や医系大学の担う役割などが論議されている。こうした諸問題について思慮深い達見を拝聴できなくなったのは誠に残念である。時代をリードする有力な指導者を失ったことは哀惜の極みである。心からご冥福をお祈りする。

## 島先生を送ることば

愛知県医師会 会長 大輪 次郎



島先生との最初の出会いは、昭和22年4月旧制・第八高等学校、バラック校舎の理科1年5・6組の教室であった。彼は、当時から“わくらば”と云う同人雑誌を作ったりする、瀟洒な学生であり、私は幣衣破帽のパンカラであったが奇妙に気が合い、“わくらば”に一文を寄せたこともあった。

その後、彼は、内科から予防医学、公衆衛生医学へと学究の道へ進み、私は外科、消化器外科、開業と臨床家への道を進み、長く合うこともなかったが、私が医師会の仕事に従事し、産業衛生にも関与するようになり、再び顔を合わせるようになった。特に彼が藤田保健衛生大学を退職し、愛知県産業保健推進センター所長となり、私が愛知県医師会会長となってからは、しばしば会うようになった。

学生時代には、私は麻雀はじめ勝負事のオーソリティであったが、彼は全く興味がなく、その方面ではつき合いはなかったが、再会した彼は遊び好き麻雀好きに大変身をしており、度々牌をたたかわせたものである。

しかし、数年前から体調不良で産業保健推進センターの運営協議会でも欠席が多く、平成14年1月にお会いしたのが最後で平成15年、早々に彼の訃報に接した。50余年の昔からの友人とのお別れは誠に残念の極みである。心から島正吾君のご冥福を祈りたい。

## 島 正吾先生を送ることば

放射線影響研究所顧問 細田 裕



昭和36年名古屋で開かれた結核病学会の際、私の発表に対する超辛口質問が島先生との最初の出あいでした。以来、一方ならぬご好誼をいただき、先生が最初にお倒れの時にも、深夜の病室から東京までお電話いただき恐縮でした。先生は医学だけでなく、人間学の面でも異才でした。1977年に現行じん肺法が公布された

時、新法への移行によって患者が不利になるのではないかと不安が高まり、先生は数回の検討会を名古屋に召集し、意見書を政府に提出しました。当時、産業衛生学会は反体制との印象があったようですが、先生の立場は常に中立で、その後も労働省の中央じん肺診査委員として活躍されました。1990年には「日本のじん肺文献索引(1890-1988)」を出版され、当時唯一の索引として好評でした。長野県の工場のじん肺判定を巡って労使の間で問題が起きたことがありました。仲裁を頼まれた先生は、労使の人達の見守るシャウカステンの前で、私と共に、意見の違いを激しく討議しながら判定するユニークな提案をされました。この読影により、判定の公正さが理解され、暗礁に乗り上げていた交渉が、解決に至ったという話が残っています。産業衛生学会のじん肺自由集会の世話人としては、時代にふさわしいトピックをつぎつぎに取り上げ、産業医学の向上に努められました。この集会在職業性肺疾患研究会に発展していることに先生も喜んでおられるでしょう。

## 島 正吾先生を偲ぶ

(株)日本労働安全衛生コンサルタント会

会長 莊司 榮徳



島正吾先生が近藤東郎先生から日本産業衛生学会理事長の職を引き継がれた平成5年の頃は学会の大きな転換期であったと思う。

就任早々の4月1日、島理事長名で第1回学会専門医試験が告示されたのをみても分かるように専門医制度は緒についたばかりであった。

産業医師会、産業看護部会の両部会も始まった間もなかった。「産業医・産業看護全国協議会」の名称も漸く定まった頃で、平成5年の秋には、名古屋で第3回が開催された。

学会の機関誌についての論議も始まり、長く親しんだ「産業医学」を「産業衛生学会雑誌」に変更するとともにA4版に改革したのも平成6年の理事会であった。

こうした数々の業績に見るとおり、島先生は日本産業衛生学会を21世紀に相応しい学会に発展させるべく鋭意努力しておられた。

しかも温顔を絶やさず、常に人の話に耳を傾けておられたお姿が臉から離れない。

東海地方会についても情熱を傾けておられ、学術的にはもとより、経営面においても見事な指導性を発揮しておられ、只々敬服するのみである。

牡丹花は 咲き定まりて 静かなり

花の占めたる 位置の確かさ 利玄

は先生の好みの歌と思っているが、晩年の先生には咲き定まり、確かな位置を占めている牡丹花と重なる静かなお姿があった。

合掌

## 故島 正吾先生の御功績を偲びつつ

労働福祉事業団医監 北里大学名誉教授 高田 勲



故島正吾先生の産業保健領域における御業績は枚挙にいとまがありませんが、先生と小生との出会いには、職業性呼吸器障害、就中じん肺症の予防と健康管理の領域でした。先生の貴重な御教示を頂きながら、現在のじん肺健康管理体系ができました。また、日本産業衛生学会理事長として学会の発展に御尽力されたことに満腔の敬意を表する次第です。

労働福祉事業団は、厚生労働省の委託事業として、都道府県産業保健推進センターを設置し、先生には愛知県産業保健推進センター所長として、同推進センター事業の活性化に愛知県方式を提唱・実践する等、事業の充実に、当時御健康が優れないにも拘らず、卓越し

た指導力を発揮して頂きましたお姿を鮮明に想起いたしております。その後先生には、残念なことに、幽明境を異にされ痛恨の極みです。平成15年には、推進センターも島根、鳥取両県に設置され、全都道府県に設置完了となりました。これにより、既に全国に整備されている347ヶ所の地域産業保健センターの産業保健活動を支援する体制が整い、産業保健サービスの全国ネットワークが形成されることを御報告申し上げます。先生のこれまでの御功績をたたえと共に深甚なる感謝を捧げます。安らかに御瞑目下さい。

## 島先生を送ることは

岐阜産業保健推進センター所長

岐阜大学名誉教授 岩田 弘 敏



私が旧厚生省門脈圧亢進症の調査研究班に属していたころ、島 正吾先生から食道静脈瘤の手術をお受けになったことを伺いました。門脈圧が亢進していたためとのことでした。あれから長い闘病生活を送られたようですが、一度も病人らしさをお見せになりませんでした。正月にご他界の悲報に接して、誠に残念至極です。

島先生との交流は長いものがあります。「東海公衆衛生の若手の集い」で先輩の宮田昭吾助教授(当時)に連れられて名古屋でお目にかかったのが最初と記憶しています。40年も前のことです。とくに島先生は宮田先生と同年代であり、かつお名前が「しょうご」と同じ呼び名であることから、この他親近感をもっていただき、宮田先生が亡くなってからは弟分のように大変親切にしてくださいました。島先生はご存知のように大変な論客です。発想が豊かで情熱家です。ご発言の中から熱意が伝わってきます。地方会長時代でも本部署長時代でも会の運営が長く熱気が立ち上がるものでした。最近産業保健推進センター所長としてご一緒させていただきましたが、ほとんどお目にかかれませんでした。3年前、富山での東海北陸ブロック会議ではしばらくぶりに先生にお目にかかり例の長い力強いご発言を伺いました。藤田保健衛生大学の医学生への国家試験対策にもご熱心でした。一度だけ補修講義のあり方など先生のご高説を情熱的に伺ったことがあります。先生からいただいたご薫陶に感謝しています。心からご冥福をお祈りいたします。

## 島 正吾先生を偲んで

東京慈恵会医科大学環境保健医学講座

教授 清水 英 佑



元日の年賀状にはご家族と一緒に撮られた写真が届き、お元気でいらっしやるとばかり思っていた矢先、まだ松もとれない4日に先生の訃報をいただき大変驚きました。

先生とは長いおつきあいをさせて頂きました。先生は、平成5年から2期6年間、日本産業衛生学会の理事長として学会に大変貢献されましたが、2期目に入る直前の3月に、突然先生から電話をいただき、総務担当理事をしてもらえないかとのことでした。理事の一人としてそれまで理事会に出席していましたが、総務という重要な仕事をやりこなすだけの自信も経験もなく、躊躇したのですが、先生の熱心さに負けお引き受けすることにしました。

平成9年には藤田保健衛生大学の学長に就任され、学会の理事長職と大学の学長職の二つをこなすことになり大変であったかと思うのですが、そのようなことは微塵も感じさせず、理事会や学会の総会・評議員会等の開催に当たり、事前に必要な指示を迅速かつ的確に下さいました。今思うと、慈愛に満ちた先生の気配りと包容力、ことの重要度の判断、沈着冷静にして的確な指示の仕方等は、その後の私にとって多くの教訓となりました。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 合掌

## 島 正吾先生への感謝

日本産業衛生学会産業看護部会長 河野 啓 子



先生に新年のご挨拶を申し上げましたところ、その返事としての葉書を1月3日に拝受しました。そこには「今年も佳い年を迎えることができました」とありましたが、その翌日、訃報を受けるとは・・・とても信じられない気持ちでした。そして今も、受け入れがたい思っています。

平成4年の産業看護部会発足以来、先生にはさまざまなご指導とご支援を賜り、言葉に尽くせぬほど感謝しております。そのおかげで産業看護部会は順調に発展し、長年の念願でありました産業看護職継続教育システムが構築できましたし、それに基づく産業看護講座も継続的に開催できるようになりました。その結果、産業看護職の実力が向上し、企業ならびに働く人びとのニーズに的確に応える活動に弾みがついたと思います。また、産業看護部会員の強い要望で、先生が創設にご尽力くださいました、日本産業衛生学会産業看護師の登録制度は、産業看護職の質の保証につながり、社会的認知を得るうえで、大きな推進力となっております。この状況をさらに発展させることが、先生のご恩に報いることと肝に銘じ、産業看護部会員皆で力を合わせて、これからも地道に努力を重ねてまいりたいと思います。

島先生、本当にありがとうございました。産業看護部会員を代表いたしまして、厚くお礼を申し上げます。 合掌

## 島 正吾先生と愛知県産業医懇談会

健康管理コンサルタント 飯田 英 男



島正吾先生のお名前を知ったのは、たしか青木國雄先生(愛知県がんセンター名誉総長)からだっと思う。青木先生が名大第一内科から東京の結核予防会へX線写真読影の勉強に行かれ、再び名古屋へ戻られて、後任にすぐ優秀な人を予防会へ送り込むことが出来たと喜んでおられた。その時はじめて島正吾という名前を知った。昭和30年前後である。私は昭和29年7月、名大第一内科からの派遣で東海銀行本店診療所長となった。そして愛知県の10名前後の常勤産業医が皿井先生を中心に集まり勉強会を開いていた。昭和32年12月に衛生管理医懇談会(現在の愛知県産業医懇談会)が発足した。そしてもう一つ愛知県職場の衛生管理研究会が愛知労働基準局三浦邦宏労働衛生課長の発案で発足し、第1回会合は昭和35年8月29日であった。シンポジウム「有害業務の管理について」の追加発言として島正吾(日本碍子)の名前が登場する。ベリリウム中毒のお話をされている。

この頃から島先生と愛知県産業医懇談会のメンバーは次第に親密さを増して、勉強会の他に夕食懇談会そして2次会的に麻雀会やボーリング会などもあり、名市大助教授になってみえた島先生は、よく付き合ってた。今は故人となられた横山恒矢(名鉄) 錫村満(東亜合成) 加藤竹男(日本陶器) 森川利彦(三菱電機) 出原汎(中部電力)などの面々である。今頃は島先生も天国で麻雀を楽しんでみえるかも知れない。産業医を大切に下さった先生のご冥福を祈ります。

## 島 正吾先生を偲んで

愛知産業保健推進センター 小 森 義 隆



島先生と私は先生が大学教授としてよりどちらかと云えば、産業医としてのお付合いを約30年程させて頂きました。先生は産業医の会合にも熱心に参加された。先生の生涯の研究課題であった、ベリリウムに関する研究も主として産



業現場における経験や、きめ細かな調査研究をされたものであった。先生は産業医問題には、熱心に取りくまれ日本産業衛生学会の産業医部会の設立には大変な尽力をされた。

先生は発想豊かな方で学会、研究会、講演会を企画される時には常に新しいアイデアを出して実行された。そしてその学会、研究会、講演会を開催された時の記録はほとんど印刷物として残された。

藤田保健衛生大学の副学長時代、学生の教育に非常に熱心で医師国家試験のための特別なカリキュラムを作られ又国家試験の時には、学内で速やかに正解答をだされ国家試験受験生に一人一人面接され合否の可能性について教示されていた。この方法は学生にも非常に評判がよく感謝されていたようであった。

学長退官後は愛知産業保健推進センターの所長として保健推進センターや地域センターの活動を活発にするように色々努力しようとされたが、その頃体調をくずされ当所の目的を充分果すことが出来ないままの状態では他界されたことは先生にとって心残りであったと推察しております。

先生の隠し芸は歌舞伎の名優の声色を時々披露されていた。

## 地方会ニュースを読み返して 島先生の偉大さを想う

清水 善 男



地方会ニュース第1号(84, 9)がお元気な皿井先生と島先生の対談のお写真で飾られていますが、島先生の余りにも今日的な発言に改めて敬服の至りです。「また産業保健と地域保健が積極的に交流・運動して、21世紀をめざしたより健康でフレッシュな方に溢れた社会づくりに邁進したいものです」

'86新春の挨拶では、低成長時代とは言え生産現場の機械化、効率化、コンピュータ化という流れの中で、新しい産業保健体制の確立に向かって学会を運営して行こうという意欲に溢れたものでした。その後90年前後には「生産工程の細分化、分極化の進展」に対応して集団管理から個人管理へという産業保健活動の在り方を適切に指摘され、産業医・産業看護部会の発足や専門産業医制度など全国組織としての学会の在り方についても所信を述べられ、93年度からは学会本部長としてまさしく全国規模でご活躍されることになりました。私は本部長の席でも親しく先生のご指導をいただけることになったわけで、そのお蔭もあって、先生の置土産ともなってしまった「日本の産業保健・あゆみと展望—産衛学会70年史—」の中で、ある座談会に参加させていただくことが出来ました。静岡しか知らない田舎者としては身に余ることで、感謝の気持ち一杯です。

なお、昭和40年代に浜松の家の内工業的な綿織物業界の綿肺について島先生達の調査報告のあることを申し添えておきます。

## 島先生を送ることば

静岡産業保健推進センター 所長 鎌田 隆



正月5日、島正吾先生の訃報に接し、誠に痛惜の情に堪えません。訃報の知らせを受けた時は唖然とし、信じられませんでした。私の手には昨日戴いた年賀状があり、「謹賀新年 早々の賀状を有り難うございました 小生おかげでどうか 佳い年を迎えることが出来ました 平成十五年元旦」と直筆で書いてありました。

記憶をたどると昨年5月、後楽園会館で開催された全国の産業保健推進センター所長会議でお会いしたのが最後でした。病氣療養中とは知らず、お見舞いにも行けず申しわけなく心残りです。先生には、東海地方会の会員として産業衛生学を通じて多くのことを学ばせていただきました。温厚な、いつも微笑を浮かべてお話をされる様子が印象的でした。今更、先生の業績については申し上げることもありませんが、平成11年静岡に産業保健推進センターが開設さ

れ、先生は愛知産業保健推進センターの所長として、小生は静岡の所長として同じ道をスタートすることになりました。先生は労働者の健康問題は産業活動と運動して地域環境への影響を包含し、拡大した取り組みが重要であると仰っていました。先生の博識と先見性を学びながらご指導をと思っておりましたが、叶わぬこととなりました。生前のご功績に対し深い敬意と感謝をあらわし先生の安らかなご冥福をお祈りいたします。

## 島先生を偲んで

国際セントラルクリニック 和田 晴 美



私が、島先生のお名前を最初に耳にしたのは名市大の看護学生の時に衛生学教室へ助教授でご就任されたときと記憶しております。

その後、藤田保健衛生大学へ移籍されてからも何かと保健師教育と産業看護職に多大なお力添えをいただいております。

先生は口癖のように、従来してきたサロン風の保健医療活動からすみやかに脱皮し衛生管理者的職能をも身につけた産業看護職の存在意義を産業社会へはっきりと認識させる必要がある。そのためには一人の声ではいかにも小さすぎる。組織づくりが必要と強調され、今日の産業看護部会設立へとつなげて頂き、いつも私達の活動を見守っていただき、部会設立後も「仏造って魂いれずの轍を踏まないように」と、いつも産業看護部会総会の片隅にお顔をだされ、辛口の指導をいただいたものでした。おわりに先生から21世紀の部会に対しての所信は、部会員を増やすこと、「産業看護学」の公的市民権を得るようにすること、実学としての「産業看護学」なる成書の発刊、部会活動の活性化のために各地方会に支部の結成、各産業保健推進センターに相談員として参画の位置づけ等を今後の課題として私達に示唆されていた。この内容をしかと噛み締め産業看護部会活動の活性化へつなげて行く事をこの機会に改めて胆に銘じて参りたく思います。最後に先生のご冥福をお祈りする次第です。

## 島先生を追悼して

藤田保健衛生大学名誉教授 大谷 元 彦



島先生は昭和29年3月名古屋大学医学部を卒業され、インターン終了後、名古屋大学第一内科に入局され、その後、東京都清瀬町の結核予防会結核研究所に昭和32年9月まで国内留学された。ここでは、結核の病理診断と胸部X線像の対比を研究され、帰局後も精力的に優れた胸部X線読影能力を発揮された。数年後、私も同じ結核研究所に留学することになり、疫学の島尾忠雄先生のもとで疫学的手法について勉強した。

先生は、昭和38年6月、名古屋市立大学公衆衛生学助教授を経て、昭和47年4月に、現在の藤田保健衛生大学(当時は名古屋保健衛生大学)医学部公衆衛生学の教授に就任された。

先生の推薦もあり、私は数年後れて、同じ藤田保健衛生大学医学部衛生学助教授として、故皿井進教授の部下として赴任した。それ以来20年にわたり、同じ研究グループの一員として、公衆衛生学と衛生学の両教室が、あたかも1つの教室であるごとく緊密な連携の下で両教室運営がなされた。先生は非常に豊かな才能を持たれ、その後、教務委員長、副医学部長、医学部長、学長として藤田学園の発展に多大な貢献をなされた。同時に、研究面では、ヒストプラスミン反応陽性例の解析、ペリリウム症例の病因解析などの基礎的研究のみならず、地域におけるじん肺管理の実践や産業衛生学会の運営や学会の開催など、まさに、教育、研究、社会的活動などにおいて、目をみはる活躍をなされ、立派な業績を残された。私も公私ともに島ファミリーの一員として大変お世話になり、いろいろご指導いただいた。先生の偉大な業績と社会的貢献をたたえるととも

に、ご冥福を心からお祈りします。

## 島先生を送ることば

藤田保健衛生大学 坂文種報徳会病院

呼吸器内科 教授 立川 壮一



昭和59年に当時の名古屋保健衛生大学に梅田博道教授の主宰する内科学教室に助手として赴任して3年が過ぎようとした頃、私の大学での部屋は梅田教授の真向かいにありました。ある日、梅田教授が出張でお留守の時、突然梅田教授の部屋に「日本医師会雑誌はないかな」と言って入ってこられた先生がいました。私は、初めてお目にかかる先生で、グレイのスーツを着用され、非常に活気のある先生でした。私はなぜかハッとしました。この先生が、公衆衛生学の島正吾教授でありました。この時の私が先生の目にとまったのか、数カ月後梅田教授から「これからは公衆衛生の助教授を兼務して仕事をする様に」と言われ、それから12年間、島教授の下で労働衛生や地域保健の勉強をさせて頂きました。先生は、初めてお会いした時の印象の通り大変に活達で雄弁で、全てをご自分でなさらないと気が済まないという方でした。先生は、内科学教室に入局された後に公衆衛生学教室に転勤されたというご経歴をお持ちで、呼吸器疾患特にじん肺のお仕事をご専門になされておりました。たくさんの方のじん肺の問題症例を持って、東京や大阪の呼吸器疾患専門医のところにお出かけになり、色々勉強されたことは、いつもお話に出てきたものです。また慢性ペリリウム肺については、その方面の第一人者で、ペリリウムの一連のお仕事を一冊の本に纏めて発表することを希望されておりましたが、残念なことに志ならずご他界なされてしまいました。先生のお仕事は、直接先生からご指導を頂いた若い医局の先生方が必ず引き継いでくれるものと思っております。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 島先生を送ることば

なごや労働衛生コンサルタント事務所 山田 琢之



「良い企画だったよ。山田君には華があるから楽しいね。これからは頑張るよ」

第30回全国産業健康管理研究会・全国会議(1990年)でのこと。島先生から直接言葉をいただき感動したのを今の様に覚えています。その後地方会総務部長、第68回日本産業衛生学会の総務・財政部長に任命していただき、島先生

のもとで働くことができたことが大きな財産になっています。理事長選、学長選時にはよく自宅に電話をいただきました。本音を打ち明けて頂いたり、逆に私の悩みを聞いていただき励ましていただきました。

名古屋市の専属産業医から大学の教官(産業保健分野)、そして今、念願の労働衛生コンサルタント事務所を開設することができ、こうして産業衛生の分野で活躍できるのも、島先生にご指導していただいたおかげであると、心から感謝しております。島先生ありがとうございました。

## 島 正吾先生を送ることば

岐阜県産業保健センター 所長 加藤 保夫



私が初めて島先生にお会いしたのは、名市大教養部2年の医学概論で、私達の心に響く授業(“患者は医者でなく白衣にお辞儀”)でした。その後M2の公衆衛生の講義(“労働者の健康に物が言えるのは医者”)、M4の実習(気管支体操等で胸部写真読影の大家と知る)、M6の臨床講義を経る中で“先生の存在”が私の心

に残り、いざ卒業という段階で、自分でも不思議なくらい自然に先生に教えを乞うことを決めました。昭和47年12月、島先生を保健衛生大学に訪ね、先生の目指される“臨床公衆衛生学”という概念に共鳴し、“産業保健診療科(内科)”、“産業保健センター(健診)”という大学の構想(結果的には日の目を見ず)に目を輝かせたのでした。

想えば教室へ入って間もない昭和48年10月、私は島先生と一緒に車で多治見へ向いました。車窓の裸の陶土と白く濁った土岐川は陶器の町の象徴でした。それから30年、今私は多治見の“産業保健センター”で健診業務に追われています。島先生は、産業医学の研究者であるとともに実践者でした。私は先生の多彩な仕事の一部であるが原点(私が勝手に想像)である“中小企業のじん肺健康管理”の実践にとって極めて魅力的なフィールドを任せていただきました。昨年12月10日、私の撮ったデジカメ写真(ばら)にニッコリしていただいた先生のお顔を思い浮かべるにつけても、その遺志を継ぐべく使命の大きさと現状の不十分さを改めて痛感している日々であります。

## 島 正吾先生を送ることば

藤田保健衛生大学衛生学部公衆衛生学教室

教授 伊藤 宜則



島 正吾先生の訃報に接した際、お元気であった頃のあのこやかな顔での叱咤激励のお姿がまず目に浮かび、言いようのない感情が込み上げて参りました。私が島 正吾先生から直接お言葉を頂けるようになったのは、昭和52年(1977年)9月に医学部衛生学教室に赴任した頃からであります。

先生は、当初より藤田保健衛生大学の副医学部長、医学部長そして学長の要職を大変長きにわたり担われ、かつ、日本産業衛生学会の副理事長、理事長と、正に学内外の様々な重責を一身に担われてこられました。そのご多忙にもかかわらず、そのご苦勞やご心勞を教室に持ち込まれることなく、個々の研究課題等に常に熱いご指導と教室員の結束に弛まぬ情熱を注がれておられました。今、医学部衛生学教室在職中での様々なことが走馬灯の様に頭をよぎりますが、夏休みに講堂に集めた6年生の国試対策に昼夜打ち込む熱気にみなぎったお姿、初年度大学院生の論文作成に対する壮烈な連日の徹夜指導、衛生・公衆衛生学教室会での研究成果報告に対する的確で強烈なご批評など、様々な場面が鮮明なドラマとして思い起されて参ります。また、初回の日本産業衛生学会奨励賞や藤田学園杯幹雄賞などの栄誉の機会を得るご支援も頂きました。

ここに、先生に賜りました多くのご芳情と温かいご指導に衷心より感謝申し上げますと共に、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 島先生の思い出

藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教室

教授 小野 雄一郎



私は名古屋大学の大学院生であった昭和53、4年の頃、当時助教授になられたばかりの竹内先生に同行して名古屋保健衛生大学(当時)を訪問し、島先生から初めて直接お話を伺いました。先生は立て板に水の如く話をされ、その迫力にはただ圧倒されるばかりでありました。

それ以来、産業衛生学会の多様な集まりで先生にお会いする機会が少なからずありましたが、先生は常に意欲満々に学会を指導しておられました。私は一度、「先生はそうにご多忙で、疲れ果ててしまわれることはないのでしょうか。」と率直に尋ねたことがあります。これに対して先生は、「いや、僕は昔からあまり疲れを自覚しない方だね。」と平然とお答えになりました。自らの姿を念頭に置いて愚問を発した私は、先生の超人的なご



返答に驚嘆するしかありませんでした。その後、藤田保健衛生大学における先生の後任教授として、恐縮なことに私を選出して頂きました。赴任してまともな驚いたことは、産業衛生学会等で中心的役割を長い間果たして来られた先生が、時期をほぼ同じくして大学においても、教務委員長、医学部長、副学長、学長などの激務をこなして来られたことでした。新設医大のこれらの職務は、学外から眺めては想像もできないような大きな困難を伴うものであり、私は島先生からその一端を直接聴かせて頂いたことがあります。また先生は学生を大変良く面倒みられ、彼らからの信望が絶大でありました。亡くなられて一層、先生の偉大さを実感致します。先生のご冥福をお祈り致します。

### 島先生を慕う

藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教室

助教授 吉田 勉



昨年の年末に、体調を崩されたことは聞いていました。しかし、それも今までと同様に風邪をひかれた位に想像し、「島先生のことだから大丈夫だろう。年が明けたら一度ご挨拶に伺おう」と考えていました。正月明けの3日、かなり状態が悪いとお話を伺い病室に駆けつけた時には、すでに幽冥境を異にされてしまいました。奥様からほんとは今亡くなりましたとの言葉を聞き、今までの様々な思いがこみ上げてきました。島先生とは、保健衛生大学医学部2年の学生の時からになります。その当時、島先生は着任したばかりでしたので、先生というものが苦手の私は、この先生なら鬱陶しくないだろうと高をくくり指導学生になりました。その年は私を含めて指導学生は3名でした。しかし、着任早々に医学部の教育に大変に熱心に活躍され、学生の間では頼りになる先生ということで、次年度には一気に人気が高まり、指導学生希望者が30名を超えてしまいました。

その後、医学部卒業を前にして、開業していた父が肺癌になりました。私が進路について悩んでいたとき、「公衆衛生学の大学院に来なさい。基礎系大学院に入っても臨床は必要なことだから臨床しながら公衆衛生にいても良い」と先生は誘われ、そのまま公衆衛生学の大学院に入ることを決心しました。いつの間にか30年という時間が過ぎ、今は先生への思いは募るばかりです。先生、本当にありがとうございました。

### 先生の教えを心に刻んで

藤田保健衛生大学医学部衛生学教室

助教授 栗田 秀樹



私が島先生の教え受けるきっかけは、卒論先の講座恩師から「豊明に新設医科大学ができ、助手を募集している。そこに若手の世界に活躍されている先生がみえるから指導してもらったらどうか」との話があったのが最初でありました。

すでに島先生の公衆衛生学にはすでに2名の助手がきまっており、私は皿井先生の衛生学講座の助手として就職しました。当時、皿井先生は大同病院病院長、大学の学長顧問などご活躍され、多忙で2週間に1度、教室にお見えになるくらいでした。

実質、衛生学教室は島先生が公衆衛生学教室と同様にご指導されました。

私は大学時代不勉強であり、衛生・公衆衛生学が何を行う学問なのかよくわからなく、また研究室で何を研究したらよいかわからない状態でありました。このように右も左もわからない私に一つ一つ根気よく、理解できるまで説明していただいたことが今でも頭から離れません。このような先生の若い人に対する指導を深く肝に銘

じて、私も若い後輩に指導していきたいとおもいます。先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

### 島 正吾先生を偲んで

藤田保健衛生大学医学部衛生学教室

講師 谷 脇 弘 茂



私が当大学を卒業し、医師免許を取得した後より、島先生の公衆衛生学教室でお世話になることにしました。それまでも島先生には医師国家試験について、卒業生一同色々な情報を提供いただいた。我々卒業生にとっては医師国家試験後の自己採点で、島先生から握手されるのが最も重要な儀式の一つであった。島先生の

教室にお世話になるようになってから、あらゆる方面に顔を出され、一息つく間もないスケジュールで毎日を精力的に過ごされていた。我々教員も島先生のスケジュールに合わせて行動するため、日曜祝日を問わずお供させていただいた。忙しかったが、充実した時間を共有できたと思います。また島先生にお供することで、各分野で活躍されていた先生方のお話しをお聞きする機会を提供いただいた。今から思うとその頃が非常に懐かしく感じられます。公私にわたり面倒を見ていただいた島先生が他界されたことは痛恨の極みでございます。生存する世界が違っても精力的に活躍されていると信じ、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。色々ありがとうございました。

### 島先生を送ることば

藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教室

講師 長 岡 芳



島先生は私にとって一番の恩師であり、今まで長年にわたって公私ともお世話になり、あらためて感謝と敬意を表する次第であります。先生との最初の出会いは医学部1年の時であり、当時授業もあまり聞かずサボってばかりいた私が、先生の幅広い知識に基づくユーモア溢れる講義だけは、なぜか聞き入ってしまい、初

めて医学、ことに社会医学の面白さ、奥深さというものを感じたということ思い出します。その後様々な場面で、先生の温かい人柄に触れることができ、将来は先生の下で仕事が出来ればと思い、産業衛生の道に進むことになりました。私が大学院生として公衆衛生学教室に入局した当時、一番印象に残っていることといえば、先生の卓越したリーダーシップのもとに、学内だけでなく学外からも医師だけではなく様々な職種の人たちが集まり、研究に従事していたことでもあります。また、これほど教室員の先生方一人一人に対して、きめ細かな配慮と時には鋭いコメントを聞くに当たり、これまで私なりの先生のイメージに対して、さらにスケールの大きさというものを感じたものでした。先生は仕事以外でも何事においても、アグレッシブに実行されてきました。晩年、体調を崩されてからも、その姿勢はまったく変わりませんでした。私も先生の生き方を手本とし、これからを過ごしていきたいと考えております。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



ハンブルグハーゲンベックにて 名市大時代



ナイアガラの滝とレインボー橋にて 名市大時代



クリーブランドにて 名市大時代



昭和55年 卒論生及び教室員と



平成元年 衛生学・公衆衛生学のメンバーと





平成6年 第10回産業医・産業保健婦・産業看護婦・衛生管理担当者のための研修会



平成9年 島 正吾学長就任を祝う会



平成9年 島 正吾学長就任を祝う会



平成11年 島 正吾先生をかこむ会



平成9年 島 正吾学長をかこむ会

## 謹んで 故 島 正吾 先生のご冥福をお祈りいたします



### 編集後記

ここに日本産業衛生学会東海地方会ニュース故島 正吾先生特別追悼号を謹んで発行致します。温かいお言葉を頂きました多くの方々に衷心より御礼を申し上げます。

日本産業衛生学会において東海地方会は活発でしかも良く結束していますねと時折他の地方会の先生方から賞賛を頂きます。産業現場と大学の立場の違い、多様な専門職、各分野の細分化など、会員の意識がともすれば四散してしまう危険性を乗り越えて、東海地方会は他に先駆けての地方会ニュースの発行、地方会学会・各種の研究會・研修會の積極的な開催、地方会理事会・部長會での熱心な討議など、多くの会員の熱意と協力を得て発展を遂げてきました。このような地方會の状況は各會員諸氏の努力もさることながら、島先生をはじめとする代々の地方會長のご尽力によるところが大であります。先生は1984年から1993年の長きにわたって東海地方會長を務められ、會員の心をまとめる要のようなかけがえのない存在となりました。

本号の発行に当たり、大きな足跡を残された先生に対して、再度敬意を表し感謝を申し上げます。

(小野雄一郎 記)

平成15年4月30日

故島 正吾先生特別追悼号編集担当委員

小野 雄一郎      谷 脇 弘 茂      吉 田 勉  
栗 田 秀 樹      長 岡 芳      (以上 藤田保健衛生大学)